



インド

インドは南アジアに位置し、インド亜大陸の大部分を占める連邦共和国である。パキスタン、中華人民共和国、ネパール、ブータン、バングラデシュ、ミャンマー、スリランカ、モルディブ、インドネシアと国境を接する。

11 億人を超える国民は、多様な人種、民族、言語、宗教によって構成されている。ヒンドゥー教徒が最も多く、ヒンドゥー教にまつわる身分制度であるカースト制度の影響や差別は今でも残っており、クラス(階層)や貧富の差が非常に大きい。このように多様な人々が存在するためインド人をひとまとめにして理解するのは難しく、貧富の差については「インドは貧しい国ではなく、貧しい人が多く住む国である」などともいわれる。

日本語による表記は、インド。これもまた、共和制であることから政体名を付加して、インド共和国とされることもある。また、連邦制をとっていることから、インド連邦としたり、稀にインド連邦共和国とされることもある。1947 年の独立から 1950 年に大統領制に移行するまでをインド連邦、それ以降をインド共和国、と使い分ける人もいる。なお、日本の外務省ではインドとしている。また、漢字では印度と表記される。

インドは 28 の州と、7 つの連邦直轄地域と、首都圏 (National capital territory) である デリーから構成される。

歴史

紀元前 3500 年頃に地中海方面から移住してきたドラヴィダ人が紀元前 2600 年頃からインダス川流域に定住・農耕生活を築きインダス文明が栄えたが、紀元前 1800 年頃に滅亡した。その後、前 1500 年頃にイラン・イラク高原から遊牧民であるアーリア人がカイバル峠を越えてパンジャーブ地方に移住した。彼らは前 1000 年頃にガンジス川流域へ移動、ドラヴィダ人をはじめとする先住民を支配して定住生活に入った。そのため、インド北部にはアーリア人の比率が非常に高い。

11 世紀初めよりイスラム教勢力の侵入があって、ガズナ朝から独立したゴール朝が北

インドを支配した。13 世紀よりデリーに都を置くデリー・スルタン朝が北インドをあいっ
いで支配し、14 世紀初頭には、デカン遠征を行い、一時は全インドを統一するほどの
勢いを誇った。一方、南インドでは、10 世紀後半ころからタミル系のチョーラ朝が貿易
で繁栄し、11 世紀には東南アジアのシュリーヴィジャヤ王国まで遠征を敢行した。その
後、14 世紀後半から 16 世紀初頭にかけてヴィジャヤナガル王国が栄えた。1498 年に
ヴァスコ・ダ・ガマがカリカットへ来訪したことを契機に、ポルトガル海上帝国も沿岸部に
拠点を築いた。

17 世紀、スペイン・ポルトガルの没落に伴い、アジア海域世界への進出をイギリスとオ
ランダが推進した。両国は東南アジアでアンボyna 事件で衝突し、イギリスは東南アジ
アから駆逐されたためインドへ進出した。しかし、インド産の手織り綿布をイギリス東イ
ンド会社がヨーロッパに持ち込むと大流行となり、イギリスは対インド貿易を重視した。
一方、フランスも徐々にインド進出を図っており、利害が対立した両国は、新大陸と同
様にインドでも抗争を続けた。

18 世紀後半、七年戦争によってフランスをインドから駆逐すると、1765 年にベンガル
地方の徴税権を獲得したことを皮切りにイギリス東インド会社主導の植民地化が進み、
19 世紀前半にイギリスの対インド貿易が自由化されたことで、イギリスから機械製綿織
物がインドへ流入、インドの伝統的な綿織物産業は破壊された。さらに、近代的な地
税制度を導入したことも、インド民衆を困窮させた。こうした要因から 1857 年、第一次イ
ンド独立戦争(セポイの反乱、シパーヒーの反乱、インド大反乱)が起こった。徹底的な
鎮圧を図ったイギリスは、翌年にムガル帝国を完全に滅ぼし、インドを直接統治下に
おいた。20 年後の 1877 年には、イギリス女王がインド皇帝を兼任するイギリス領インド
帝国が成立した。

ただし、小規模な貿易拠点などのいくつかが、フランスやポルトガルの植民地のまま残
った。

第一次世界大戦で、自治の約束を信じてイギリスに戦争協力したにもかかわらず裏切
られたことや、民族自決の理念が高まったことに影響され、インドではさらに民族運動
が高揚した。マハトマ・ガンディーの登場は、いままで知識人主導であったインドの民
族運動を、幅広く大衆運動にまで深化させた。ガンディーが主導した非暴力独立運動
は、イギリスのインド支配を今まで以上に動揺させた。第二次世界大戦では国民会議
派から決裂した左派のチャンドラ・ボースが日本の援助によってインド国民軍を結成し、
独立をめざす動きも存在した。

現代

近年は IT 産業や製造業を中心に経済成長を続け、ロシアやブラジルなどとともに BRICs の一角として注目を集める存在となった。また、2006 年 7 月 9 日には、核弾頭搭載可能な中距離弾道ミサイル「アグニ 3」(射程 3500km)の初の発射実験を行った。

日本とのつながり

近代以前の日本では、中国を経由して仏教関連の情報とともにインドについての認識があったが、情報は非常に限られていた。そのころはインドのことを天竺と呼んでいた。また日本・震旦(中国)・天竺(インド)をあわせて三国と呼ぶこともあった。

第二次世界大戦ではインド国民会議派から分派した独立運動の指導者チャンドラ・ボースが日本軍の援助の下でインド国民軍を結成し、日本軍とともにインパール作戦を行ったが、失敗に終わった。

原爆の落とされた毎年 8 月 6 日に国会が会期中の際は黙祷を捧げている。

1948 年、第二次世界大戦の極東軍事裁判において、インド代表判事パール判事(ラダ・ビノード・パール、1885 年 1 月 27 日 - 1957 年 1 月 10 日)はイギリスやアメリカが無罪なら、日本も無罪であるとして、日本無罪論を発表した。

日本テレビ系番組ウッチャンナンチャンのウリナリ!!にてインド映画を紹介したり、自ら主演する企画があった。この後日本でインド映画が上映されることが多くなったことがある。

経済

独立以降、重工業の育成を図り、国内産業保護を政策としていた。その後、1991 年に通貨危機をきっかけとして経済自由化に政策を転換した。2007 年現在、インドは他の経済成長を遂げている国と併せて BRICs と呼ばれるなど、将来を有望視されている。

産業構造は、農業、サービス業の比率が高い。傾向としては、農業が減りサービス業が伸びている。

貿易については、産業保護政策をとっていたため貿易が GDP に与える影響は少なかったが、経済自由化後は関税が引き下げられるなどされ、貿易額が増加、GDP に与える影響力が大きくなっている。主な貿易品目は、輸出は宝石や医薬品、輸入は宝飾製品や原油など。主な取引相手は、米国、中国や中東などとなっている。

インフラ

マンモハン・シン首相は「外国企業の誘致に向け、インフラ整備や税制の簡素化、関税の削減、申請手続きの迅速化を進めてきたが、「まだ十分ではない」と述べ、改善を

急ぐ考えを明らかにしている」

P・チダンバラム財務大臣は「民間企業による投資が、年率 9%成長の維持に不可欠とみており、「国内外を問わず民間企業が投資できる環境を整備する必要がある」と述べた」

2007 年度予算案では、インフラ整備への予算配分を増加。投資額は前年度 40%増の 1 兆 3400 億ルピーとなっている。また、経済成長持続に向けてさらなる投資が必要としている。「インドは今後 5 年間で道路や空港、港、鉄道などのインフラ整備に向けすすむ」

見通し

今後の見通しについて、インフレ圧力や、経済が過熱して、実際の成長率が潜在成長率を上回っているという報道もあるが、見通しとしては基本的には明るい。

BRICs を最初に提唱したゴールドマン・サックスは、「インド経済が今世紀半ばに米国を追い抜き、中国に次ぐ世界 2 位の経済大国に成長する」とのレポートを出している
主な農業

1960 年代から穀物の増産に成功し、緑の革命と呼ばれる。

米、世界生産量第 2 位。綿花、世界生産量第 3 位。小麦、世界生産量第 2 位
ジュート、世界生産量第 1 位。茶、アッサムティーとダージリンと呼ばれる。世界生産量第 1 位

主な工業

綿工業(現在は衰退)、ジュート工業: ムンバイ

鉄鋼業: ジャムシェードプル

集積回路: バンガロール、プネー

インドは IT 分野で注目されているが、バイオテクノロジーにも力を入れている。

行政機関としては、1986 年にはバイオテクノロジー庁を設立した。

インドにおけるバイオテクノロジーにおいて、成長、成功している産業として、医薬品産業が挙げられている。医薬品産業が成長している理由としては

化学、品質管理技術が高い … アメリカ国外においてアメリカ食品医薬品局(FDA)の承認を受けている工場は、インドが一番多い

人件費が安い … 2007 年時点において、アメリカの 6 分の 1

人材が豊富

研究製造業務受託サービス(CRAMS)を提供している

知的財産保護の体制が確立している … そのため、アウトソーシングがしやすいが挙げられている。

後発医薬品市場においては、国別ではイタリアを抜いて2位になると言われている。また、臨床試験市場でも、将来を有望視されている

アメリカとのつながり

冷戦期の反米親ソ路線とは裏腹に現在では友好関係を保っている。インドではソフトウェア産業の優秀な人材が揃っており、英語を話せる人も多いためアメリカへの人材の引き抜きや現地でのソフトウェア産業の設立が盛んになっている。そのため、ハイテク産業でのアメリカとのつながりが大きく、アメリカで就職したり、インターネットを通じてインド国内での開発、運営などが行われたりしている。NHK スペシャルの「インドの衝撃」では、NASA のエンジニアの約 2 割はインド人だと伝えている。

また、アメリカとインドは地球の反対側に位置するため、アメリカの終業時刻がインドの始業時刻に相当し、終業時刻にインドへ仕事を依頼すると翌日の始業時刻には成果品が届くことからインドの優位性が評価されるようになった(→オフショア)。

英語の運用能力が高く人件費も低廉な為、近年アメリカ国内の顧客を対象にしたコールセンター業務はインドの会社に委託(アウトソーシング)されている場合が多い。多くのアメリカ人の顧客にとってインド人の名前は区別し難いため、電話応対の際インド人オペレーターはそれぞれ付与された(アングロサクソン系)アメリカ人風の名前を名乗っている。

交通

高速道路などは計画・建設中の段階である。デリー・コルカタ・チェンナイ・ムンバイを結ぶ延長約 5800km の道路(通称「黄金の四角形」)が 2005 年末に完成予定であり、また、国内を東西方向・南北方向に結ぶ +型の延長約 7300km の道路(通称「東西南北回廊」)も 2007 年末に完成する予定である。

言語

インドはヒンディー語を連邦公用語、英語を準公用語とする。ヒンディー語圏以外では

各地方の言語が日常的に話されている。インドで最も多くの人に日常話されている言葉はヒンディー語で、約 4 億人の話者がいると言われ、インドの人口の約 40%を占める。英語も全国的に広く普及している。100 種類以上の言語が話されているインドでは、地域が異なればインド人同士でも意思疎通が難しい場合があり、そのような場合に英語が用いられる。このように英語はインドの共通語としての性格も持っている。ヒンディー語圏以外の地方では地方の言葉以外に英語とヒンディー語を加えた三つの言葉話せる人も多い。またクラスや職業によっては、そもそも英語を母語にする人も珍しくなく、英語しか話せない人もいる。大企業やハイテク産業では大抵の場合、英語が話されている。

その他

ギリシャの数学がインドで応用され、数字の 0(ゼロ)を加えて発展させ、アラビアでの完成への中継ぎの役目を果たした。

世界初の大学はインドの Takshila にて紀元前 7 世紀に設立された。紀元前 4 世紀に設立された Nalanda 大学における教育学も一つであるが、今は見る影もない。

インドは世界で初めてダイヤモンドを広めた。GIA の発表によると、西暦 1896 年までインドは世界へのダイヤモンドの唯一の源であった。

1500 万人とも言われる膨大な数の在外インド人(NRI/Non Resident Indians)は世界中に移住しており、その中の一部はインドへの投資も積極的である。

アインシュタインは「現在の我々があるのは数の数え方を教えてくれたインド人のおかげである。それが無かったら、その後の重要な科学的な発見は成しえなかった。」と個人的な感想を残したが、アインシュタインは歴史を専攻しておらず、このような勘違いをした。

2007 年にて日本の 24 億万長に比べてインドの億万長者 37 人となった。